

静脩

1994年9月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 31, No. 2

坪井家旧蔵本の洋学資料

総合人間学部教授 松田清

京都大学附属図書館は京都の蘭方医新宮涼庭旧蔵書(新宮本)、美濃大垣の江馬蘭学塾旧蔵書(江馬本)など創設(明治32年)間もない時期に寄贈を受けた貴重な蘭学資料を所蔵しており、昭和初期には当時の新村出館長の尽力により京都の蘭学者辻蘭室の文書、および膳所藩出身の洋学者黒田鞠廬旧蔵洋書を加えることが出来た。最近ではこれら館蔵資料を中心とした洋学資料展「江戸期における翻訳の世界」(平成4年12月)が機縁となり、「訳業日乗」をはじめとする黒田鞠廬関係資料を一括してご子孫より寄贈していただき、その目録も刊行された。

平成元年2月、日本医学史資料の宝庫である富士川文庫を医学図書館の特別書架で検索中、隣の書架に雑然と排架された未整理本があるのに気づいた。蘭和辞典「ドゥーフ・ハルマ」の分厚い写本10冊が最初に目に止まり、手垢でよごれた蘭書を開くと「日習堂塾本」の朱印が飛び込んできた。日習堂は美濃出身の蘭学者坪井信道(1795-1848)が天保三年(1832)江戸に開いた蘭学塾である。その後さらに調べていくと、日習堂の塾頭で嘉永五年(1852)信道の女婿となった大木忠益(坪井為春、号芳洲、1824-1886)の蔵書および芳洲の西洋医学所教授時代、文部省時代、埼玉県医学校長時代の翻訳草稿、芳洲の二男で明治32年京都帝国大学医科大学の創設に携わり、医科大学学長となった坪井次郎(1862-1903)の衛生学関係資料、次郎の長男で京都帝国大学医学部を卒業後、慶応大学医学部を経て小児科医となり、上海滞在中(1932-33)に作家魯迅と交友を深めた坪井芳治(1898-1960)旧蔵の医学書、等々坪井家四代にわたる蔵書と判明した。

この蔵書は洋学史上の貴重資料を多数含み、上記

諸本とも比肩しうるものと考えられたので、十分な書誌的研究を行う余裕を得ないまま、当時京都教育大学におられた末中哲夫教授(現在は早稲田大学大学院)のご協力を得て、とりあえず簡単な仮目録を作成し、手元に置くことにした。上記資料展の際には、この蔵書を坪井本と名づけ、その一部を出陳したことがあるので、展覧者のなかには坪井本の重要性に気づいた方もおられたかも知れない。

本年4月、富士川文庫が医学図書館より附属図書館に管理換えになるに際して、坪井本も附属図書館に移管し、整理登録してはどうかという話になった。医科大学初代学長として奮闘中、明治36年7月41歳の若さで亡くなった坪井次郎の蔵書、父ゆかりの医学部を卒業した子芳治の蔵書であってみれば、寄贈図書館の可能性が極めて高いにもかかわらず、残念ながら医学部または医学図書館への収蔵の経緯が明らかでないとの事である。幸いにも坪井家のご子孫と連絡が付き、このたび附属図書館への寄贈をご快諾いただき、その手続きをしているとの事であり、永年眠っていた貴重資料が近く公開されるはずである。筆者はこれまで上記仮目録をもとに書誌調査を進めてきたが、不十分ながら若干の新知見を得たので、附属図書館への移管を機に、日習堂旧蔵書と坪井芳洲旧蔵書に限って、洋学関係の貴重資料をいくつか紹介してみよう。

日習堂旧蔵書

箕作阮甫とともに宇田川玄真門下の双璧と謳われた坪井信道はブルハーフェ『万病治準』の翻訳と診断学書『診候大概』の著述を完成(1826)後、蘭学塾安懷堂を江戸深川に開き(1829)、原書の徹底講読

による厳しい教育によって川本幸民、緒方洪庵を育てた。天保3年(1832)開塾の日習堂でも同じ教育方針のもと、広瀬元恭、杉田成卿、大木忠益(坪井芳洲)、黒川良安、佐渡良益(坪井信良)、鹿田文平、吉木蘭斎らが研鑽した。日習堂は嘉永元年(1848)信道が没すると、信道の長女を娶った義子信良が診療に当たり、養子となった為春が塾生の教育を担当し、安政3年(1856)の地震まで続いた。

坪井本の蘭書刊本18点中、信道の号をとった蔵書印「誠軒図書」を有するものは、フーフェランド『神経熱及びチフスの研究』(1814)、ヘイマンス『一般生理学基礎』(1820)、イスフォルディング『医学教育用理学提要』(1826)、ヤコブソン『ヘルニア帯(Leer der breuken)の正しい考察』(1837)、バイエル『オランダ語作文提要』(1839)の5点である。信道の蔵書も塾生に貸し出されたらしく、最初の3点は特に手垢で汚れ、よく利用されている。ヘイマンスの表紙には「嘉永六癸丑年三月念八日／平満斯／借読主／布留川氏」「借読主顕堂」の墨書があり、日習堂の門人布留川顕堂の勉学ぶりが偲ばれる。宇田川榕菴の「親和論」は本書の抄訳である。イスフォルディングは宇田川玄真に「伊斯忽爾陳屈教示内外科学徒窮理説」、緒方洪庵に「医家須読理学入門」(1842までに成)、広瀬元恭に『理学提要』(1854)の訳がそれぞれあり、宇田川、坪井一門で重視された教科書であることが分かる。嘉永元年坪井信良が作成した「日習堂蔵書目録」の「蘭書部」をみると、原書50点、写本15が挙げられている。「誠軒図書」を有する上記の蘭書5点はこの目録の原書中「扶氏神経熱」「ヘーマンス原生」「イスホルヂンク」「ブレウク書」「バイエル」にそれぞれ対応するものであろう。また、この目録中「沕乙蘭土字書十一本」「沕乙蘭土学語」「扶氏パトゲニー」「アヂアチセコレラ 二本」「マイグリエル解剖」とある原書は、それぞれ坪井本のウェイランド『詳解オランダ語辞典』(1799-1811, 11vols.)、ウェイランド『学術用語辞典』(1846)、フーフェランド『病理学初篇 発病論(Pathogenie)』(1801)、フローリク編『アムステルダムを中心とするアジア・コレラ調査報告集』(1832, 2 vols.)、メグリエ『実践的・理論的解剖学提要』蘭訳(1824)のことであろう。最後のメグリエには「日習堂塾本」の朱印と「マイグリエル解體書／二卷之内／千八百二十四年」の挿入紙墨書がある。

蔵書印はないが、日習堂旧蔵蘭書と考えられるも

のに、リシュラン(リセランド)『人身窮理新論』蘭訳がある。標題紙を欠いているが、二巻本(1826)の第一巻 pp.173-590を複製本したものである。「日習堂蔵書目録」の「リセランド原生 二本」に比定できよう。本書も宇田川榕菴訳「人身窮理書」、堀内素堂(米沢藩医、信道の親友)・黒川良安・青木研蔵(周弼の弟)共訳「医理学源」(1844成)、箕作阮甫訳「人生鏡原総論」、広瀬元恭訳「利撰蘭度人身窮理」の翻訳があり、宇田川、坪井一門でよく使用された教科書であった。

蘭学時代に蘭書は極めて高価なため、筆写本が多く作られ流布した。坪井本にも蘭書筆写本8点が含まれ、そのうち書名が判明のものはフーフェランド『病理学初編 発病論』蘭訳(1801)、シュプレングル『治療規則概論』蘭訳(1825)、コンラディ『一般病理学提要』蘭訳(1833)、モル及びエルディック編『実践医学雑誌』(1833-1837)(第12巻～第16巻から症例研究論文を抄写したもの、2冊)、モスト『実践薬学辞典』(1843)(薄葉紙本4冊)の5点である。最初のフーフェランドの表紙には「欧羅巴州独乙大醫扶歇蘭度病理論誘道篇」と墨筆大書されており、その原書の所蔵とあわせて、日習堂におけるフーフェランドの重要な位置を物語る墨書といえよう。坪井信道自身に「扶歇蘭土神経熱論」の翻訳があるが、弟子の緒方洪庵は師の勧めで宇田川玄真にも学び、玄真の遺志を継いで「原生」(生理学)と「原病」(病理学)を研究、処女作『病学通論』を著した。上記坪井本のフーフェランド、シュプレングル、コンラディはいずれも『病学通論』の原書であり、洪庵はその訳稿を信道に送り校閲を受けた。のちに洪庵はフーフェランドの五十年にわたる治療経験を集大成した内科書『扶氏経験遺訓』を緒方郁蔵と共訳するが、その訳稿もおなじく師の校閲を得ている。モル及びエルディック編『実践医学雑誌』全25巻(1822-1856)はヨーロッパの主要医学雑誌から症例研究論文を収録したもので、フーフェランドの論文も多数含まれている。箕作阮甫はこの雑誌を元に『泰西名医彙講』(漢訳、1836-1842刊)を編集したが、坪井本の写本にある「蒙爾・越而実吉両先生集輯衆医経験第十年」(1冊)は同誌第10巻(1831)からの抄訳(漢字カナ混じり文)である。

坪井本の写本に「誠軒図書」印をもつ高野長英「驗温器略説」(天保2成)がある。巻末に「辛卯冬隴月 東奥 高野讓長英述於東都鞠街貝阪之寓居」とあり、シーボルト事件後江戸に出て開塾した直後

の訳述である。長英は天保元年(1830)信道に初めて会い、「放蕩を絶し書生を教授し、大都を一震可仕」と語ったという。天保9年には信道夫人(青地林宗の長女)の妹を娶り、義弟となっている。

「日習堂塾本」の朱印を持つフレメリ「化学的製薬法講義」(蘭文写本、八折り判全8冊中存5冊607葉、但し第1巻、第2巻、第6巻の3冊欠) *Fremerly, N. C. de, Dictaten der chemisch-pharmaceutische bereidingen.* は坪井本の中でも特に貴重な資料として注目すべきものである。フレメリ(1770-1844)はオランダにおけるラヴォアジエ化学導入に功績のあったユトレヒト大学教授(1795-1840)で、医学、化学、薬学、自然史を講じた。日本におけるラヴォアジエ化学の導入者宇田川榕菴が参照したラヴォアジエ『化学提要』はフレメリとユトレヒトの薬剤師ウエルクホーフエンによる蘭訳(1800)であった。またフレメリは『バタビア薬局方』(1805)以降の、フルクロワ、ヴォ克蘭、ベルゼリウスなどによる化学の発展成果を取り入れた『オランダ薬局方』(ラテン語版1823)の制定にも参画した。この「オランダ薬局方」のオランダ語版(1826)には洪庵の訳がある。フレメリはこのように翻訳と薬局方を通して幕末の化学、薬学研究に間接的に貢献しているが、筆者が今夏オランダ滞在中に調査したところによると、坪井本の「化学的製薬法講義」はオランダにも写本のない孤本の講義録であり、内容は『オランダ薬局方』の詳細な解説と注釈である。しかも所々不審紙が貼られており、明らかに日本人による研究の跡をとどめている。この講義を3年半受け優秀な成績をおさめたユトレヒト大学の学生にあてたフレメリ自筆の成績証明書が残っており、その日付が1830年4月20日となっている。その後ほとんど海をわたり日習堂の有に帰したこの講義録を誰が読んだらうか。川本幸民か緒方洪庵か。今後の検討を待たねばならない。

「M.K.moenenoli (ムネノリ)」編 *Aphabetische verzameling van de namen der geneesmiddelen.* (薬名辞彙)は杉田成卿の蘭文序文(嘉永六年三月五日)と編者の蘭文前言(嘉永六年一月)を持ち、第一部(羅蘭和)第二部(蘭和)第三部(羅蘭和)の三部から成る。編者は松木宗則、すなわち松木弘庵(寺島宗則)ではなかろうか。松木は川本幸民に蘭学を学んでいる。幕末におけるこの種の薬名辞彙は他に数種類知られているが、「m.s.kenzoo」(未詳)編緒方三平(洪庵)増補のもの(天保5年成)も併せて相互に比較検討す

れば、日習堂を中心とする薬学研究の発展と各地への普及ぶりをうかがうことができよう。

坪井芳洲旧蔵書

米沢の郷医の子に生まれた大木忠益は天保15年(1844)二十歳で日習堂に入門、弘化4年塾頭となり、嘉永2年折りからの兵学ブームのなか薩摩藩に仕官し、安政元年薩摩藩医として名を坪井為春(芳洲)と改めた。芳洲が修業時代に書き留めた「文帙」(蘭書翻訳ノート・単語帳9綴からなる)は日習堂における教育の実際を知る上で極めて貴重な資料である。芳洲は日習堂で教科書に使用された蘭書だけでなく、「佐久間所持の兵書」からも例文を引用している。

「佐久間」とは天保15年信道の紹介で塾頭の黒川良安からオランダ語を学んだ佐久間象山のことである。

芳洲旧蔵の蘭書としては、ニューウェンホイス『学芸百科事典』全8冊(1820-28)中K-M, R-S, T-Wの端本3冊、および同事典の『補遺』全9冊(1833-44)中、G.-K, L.-O., V.-Z.の端本3冊、ツインメルマン『地球とその驚異』蘭訳(1854-56)、ペレイラ『薬学概論』蘭訳(1849)、ドンドゥルス編『オランダ眼科病院治療教育年報第二号』(1861)がある。最後のものには表紙に松木弘庵と箕作秋坪あて編者の自筆献辞「*h^{er}. Matsiki Kowan en h^{er}. Mitsukuri Siuhei hoogachtend aangeboden door F. C. Donders*」がみられる。1862年オランダ滞在中の両者に贈られたものであろう。また唯一の英書としてグレイ「解剖書」(1870)がある。

芳洲の堂号と思われる「日新堂」を版心にもつ写本として、蘭和辞典「ドーフ・ハルマ」10冊、「忽氏薬性論(薬物論)」6冊がある。「ドーフ・ハルマ」は日習堂にも一揃いしかなく、芳洲が門人たちに筆写させたものであろうか、写し誤りが朱で訂正してある。文久元年幕府が創設した西洋医学所(文久3年医学所と改名)の教授(薬剂学)として、芳洲は緒方洪庵、松本良順の頭取のもとで勤務した。この時代の訳稿「虎狼痢(ころり)治則」「亜細亜虎狼痢病論」には版心に「西洋医学所」とある。版心に「医学所」とみえる不揃い本の「單涅爾(タンネル)治科各論」は「坪井中博士訳」とあるので、明治2年あるいは4年以降の訳稿であろう。医学所時代の「試業日録」とでも呼ぶべき懐中備忘録は元治元年10月から慶応2年11月までの日付をもっている。「單涅爾薬剂篇付録英国局方」という訳稿の版心には「大学東校」とある。明治5年から7年までの文

部省出仕時代の草稿では、日本語の身体部位名を集めた「体部名」、「丹氏内科新書目次」（「原本紀元千八百七十年米利堅第五版」）がある。「ミユラル氏生理日講紀聞」もこの時代の訳稿と推定される。明治9年から8年間つとめた埼玉県医学校時代の訳稿としては「仁墨爾(ニメル)氏内科書」（肺出血ノ条）と「欧米医学沿革史」がある。その他興味深い写本をあげれば、日蘭修好条約・貿易章程(1858)のオランダ語条文写本には朱で訳語が多く書き込まれており、「西伊勢蔵氏舌病容体書」に対する蘭医デ・マアイル氏の案文は原文と芳洲の訳文(1867年3月1日付け)が綴じられている。

最後に、洋学資料ではないが、芳洲旧蔵と考えられる写本「童観筋記」はこの場をかりて是非紹介して置かねばならない。米沢藩の儒医片山元儔(1663-1723, 号童観)の編纂した問答体の類書で、全35巻のうち坪井本は「巻之一下、時候類」「巻之二、人

品類、人体類」「巻之四、植物類」「巻之六上、文芸類上」「巻之六下、文芸類下」「巻之十三、経解類下之四」「巻之十五、経解類下之六」「巻之十九、技芸類」「巻之二十一、弁異端類」「巻之下、医学類、ト筮類」「巻外補遺中、雑類」の11冊からなる。これだけ伝わっている例は他にないようであり、貴重である。

坪井信道、芳洲、次郎、芳治という四代の医学者の伝記は、本稿でも参照した仲田一信『埼玉県医学校と日習堂蘭学塾』（1971）、青木一郎『坪井信道詩文及書簡集』（1979）、斎藤祥男『蘭医家坪井の系譜と芳治』に詳しいが、日習堂の蘭学自体は蘭学の本流に位置しながら、これまで余り研究の日があたらなかった。ここに一端を紹介した坪井本の新資料公開によって、日習堂蘭学の解明が進むことを願わずにはいられない。

理学部図書管理システムについて

理学部地球物理学教室技官

麻 生 和 彦

1. はじめに

最近の技術の進歩により、ひと昔前の大型計算機程度の処理能力を持った計算機が、今では低価格になり、誰もが手軽に利用できるようになりました。そのおかげで、いままで附属図書館などの大規模な施設でしかできなかった「貸出・返却・予約の管理」、「利用の統計処理」等の図書業務の電算化を、低価格で高速なワークステーションやパーソナルコンピュータを使って学部・教室の単位でも実現することができるようになってきました。

ワークステーションを使って図書管理システムを構築することにより、(1)電算化にともなう図書業務の簡素化、(2)各教室で行われる処理の分散化、(3)各学部・教室の特徴に合わせた図書管理システムの構築ができるようになります。

しかし現状は、これらのハードウェアにたいしてソフトウェア面では、附属図書館などで利用されている汎用機上で動作する図書管理システムはありますが、ワークステーション上で動作するシステムが用意されていません。

そこで、理学部では OMRON 社が自社向けに開発した図書管理システムをベースに理学部図書システム小委員会が中心となり大学の実情にあったシステムを開発することにしました。

2. 図書管理システムの概要

現在開発中の図書管理システムでできる図書業務の内容は(1)貸出・返却・予約処理、(2)目録検索処理、(3)発注・受け入れ・支払処理、(4)目録入力処理、(5)利用者・蔵書マスターの管理処理、(6)各種統計処理です。

上記の図書業務を実現するための図書管理システムのハードウェアの構成は、以下のとおりです。

(図参照)

ワークステーション	LUNA-II DT2465G
	メインメモリー 8 MB
	内蔵ディスク 250MB
	カセットストリーマ
周辺装置	バーコードリーダー
	2 GB 磁気ディスク
	光磁気ディスク装置
	レーザープリンタ
	DAU
端末装置	PC-9801 BX 2

これらのハードウェアを用意することによって、(1)バーコードリーダーを利用することによって、従来の貸出・返却処理が利用者 ID 番号と蔵書 ID 番号の読みとり操作をするだけでできます。また、利用者・蔵書の更新、削除などの管理業務もバーコードの読みこみによってできます。(2)膨大な量の蔵

書データの保存も、光磁気ディスクを利用することによってディスクの入れ替え作業だけで行え、磁気ディスクを増設するより安価に保存できます。また、図書管理システムがクラッシュしたときも光磁気ディスクにシステムをバックアップしておくことによりディスクを入れるだけで復旧することができます。(3)図書室外からのシステムの利用者に対してネットワーク(KUINS、教室 LAN)からの利用ができるだけでなく、まだネットワークの設備が整っていない場所からも利用できるように DAU をとりつけ、電話回線からログインできます。

各教室レベルで利用しやすい環境を考えて図書管理システムのソフトウェアでは、(1)どのメーカーのワークステーションでも利用できるように、互換性が高い OS の UNIX と言語の C、INFORMIX で構築、(2)どのような端末からでも利用できるように、キャラクターベースでシステムを構築、(3)各教室の特徴に合わせたシステムを容易に変更・構築できるように、各処理ごとを部品として開発し、それら部品を組み合わせることによってシステムを構築、の3点を中心に開発を進めています。

3. システムの拡張

現在のシステムでは、図書業務の電算化を中心に開発されていますが、KUINS や教室内 LAN 等のネ

ットワーク環境を利用した、

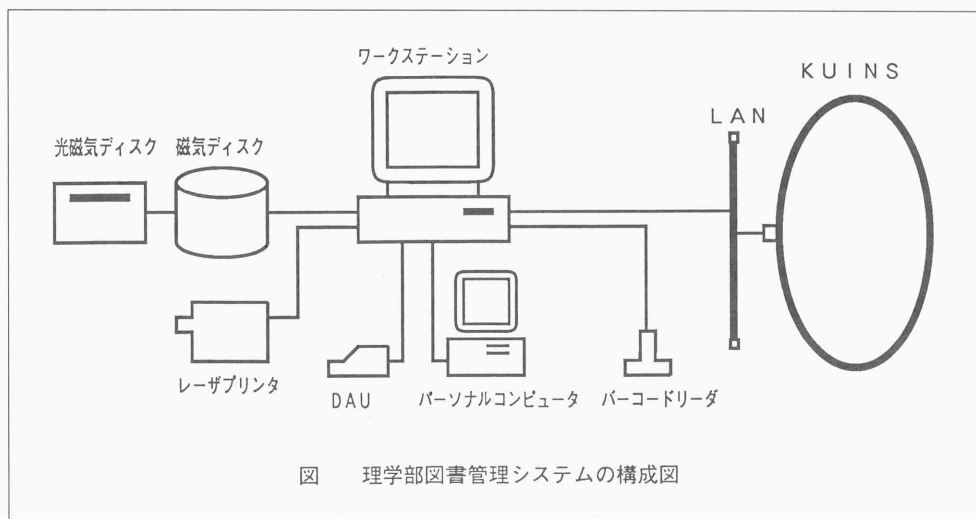
- 利用者図書室の連絡用に電子メール利用サービスの提供
- 各図書室の情報(利用上の注意、新着図書の案内、休室のお知らせ等)を利用者が研究室の計算機から読むことができるような、ネットワークニュースのサービスの提供
- 提供する情報を文字だけでなく写真や音などでも提供できるように¹⁾WWWサービスの提供

以上のサービスを、これからの図書管理システムに組み込めるようにしたいと考えています。

4. おわりに

図書管理システムを使うことによって従来の図書業務を簡略化することが可能となりますが、それを使いこなさなければ新しい仕事が増えるだけになってしまいますので、電算化を行うときはシステムの開発と同時にそれを実際利用する図書職員に対して十分に使いこなせるだけの研修や、利用者に対しての十分な広報が必要だと思ひます。

¹⁾マルチメディア対応のネットワークを利用した情報提供システム。WWW とは、World Wide Web (世界に広がった蜘蛛の巣)の略



鈴鹿本今昔物語集の修補に関わって (特別寄稿)

前附属図書館事務部長

吉 岡 千 里

新聞報道等によれば、平成6年7月18日、修補を終えた9巻の鈴鹿本今昔物語集の完成披露が鈴鹿氏を招いて附属図書館館長室で行われ、同26日には各

報道機関を招き記者発表も行われたとのことである。私も7月27日の朝刊各紙に掲載されたこの記事を読み、修補に関わった一人として感慨無量の思いであ

った。振り返ってみれば、平成3年10月、鈴鹿家から寄贈を受け、同年度に第1年次分（第4分冊）の修補に着手して以来、3カ年の歳月と、約2千万円の経費を費やして完了したものである。鈴鹿本今昔物語集は、虫害がはなはだしく、見ることをはばかられたため、“幻の写本”として世間に知られていたが、今回の修補では、本紙を解体して、すべてのページを、破損の状況に応じて、現在求め得る最高の技術で裏打ちと補修を行い、本文を保護するため、新しく表紙と題簽を付加する等の処理が行われた。京大で受け入れた状態は、各分冊がそれぞれ白い美濃紙に包まれているのみで、表紙や書写した内容を示す題簽は存在していなかった。各分冊に“何巻が書写”されているか分からないので、無意味にページをめくり、破損がすすむ結果となっていた。

今回の修補では、国立国会図書館所蔵のマイクロ版や、日本古典文学体系（岩波）で点検しながら慎重に作業をすすめた。新しい表紙と外箱は、この資料が修補後に、重要文化財に指定されることも考慮して、他の重要文化財コレクションと同じ仕様でまとめられた。なお、題簽の文字は、朝尾直弘館長（文学部教授、国史学）の揮毫である。

この度の修補で、受け入れ後に京大で補修・変更を行ったのは次の事項である。

1. 各分冊の版型を若干大きくしたこと。

“のど”の部分に書き込まれていた文字を読みやすくするため、綴じ糸の位置を中心から外側にずらす必要が生じたこと、及び、最も大きい分冊の版型に全部の型を統一したためにおきたことである。

2. 版型が若干大きくなったため、新たに桐の外箱を作成した。※「今昔物語集」の墨書があり、また、裏に「尚堅舎藏」の朱の押印があった鈴鹿家の外箱は、別に大切に保存されている。

3. 本紙を解体したことで、“紙の裏”に書写されていた数行の文字を確認し、これを解説文に注記することにした。

4. 本紙の修補が終了し、製本にかかる前に、各ページ毎の写真撮影を行い、影印本作成のために完全なネガ・フィルム原版を作成した。

5. 修補で不要となった“こより”を使用して、紙

質の科学的な年代測定を行った結果、こよりについては鎌倉時代の紙が使用されていることを確認した。※名大年代測定資料研究センター（中村助教）に測定を依頼して判明した。

最後に、鈴鹿家から無償で寄贈を受けた経緯について、後日の記録のために述べておくこととする。今昔物語集は数十年前から京大図書館に寄託されていたが、平成2年6月頃、寄託解除の申し出があった。これに対して、貴重な文化遺産であり、また、研究資料としても極めて重要でありながら、虫害のため利用できない状態であること、また、京大が修補する場合の計画案と経費見積もりを提示し、個人の努力では健全な保存は困難なことなどを説明し善処をお願いした。

その後、鈴鹿一族で協議が行われ、“修理と、研究者への公開、”等を条件に寄贈していただける事となった。修補計画を実行するに際しては、西島前総長、井村総長を始め、事務局関係者の多大な御援助・御協力により、実現することができた。また、影印本の作成も日程に上っていると聞いている。

京都大学としては、鈴鹿家に、全国の研究者を代表して、ひたすら感謝するのみであった、ただ、幸いなことに、平成4年10月、日本政府は鈴鹿氏に紺綬褒賞を贈り感謝の意を伝えている。

私事で恐縮であるが、国文学研究資料館の創設準備にかかわったことがある。当時、国文学会の代表者が故久松潜一先生であった。若輩の役人にも、熱意を込めて国文学の研究資料の特色、例えば、書写されたものは、それぞれ別の写本であり、その異同を確かめることも国文学では重要な研究テーマとなっているなど、関係機関に陳情のお供をした我々にていねいに説明していただいたのも懐かしい思い出である。久松先生が育てられた研究者が鈴鹿家の善意の賜物であるこの資料を活用して、優れた研究成果を数多く発表されることを願っている。最後に、今回の無償寄贈から修理完了まで、実に多くの人々の御協力をいただいた。紙数に限りがあるため氏名を省略せざるをえないが、これらの人々に支えられ任務を終えることができたことに感謝の意を表するものである。

お知らせ

展示会「吉田松陰とその同志」の開催

平成6年度の展示会を下記のとおり開催しておりますのでお知らせします。今回は、本館所蔵の維新

特別資料文庫から、吉田松陰を中心にした幕末の勤皇志士たちの事跡を、遺墨、遺品等から見る事ができる展示会です。

名称：「吉田松陰とその同志」
 会期：平成6年9月26日(月)～10月28日(金)
 (日曜、祝日は除く)
 午前10時～午後5時
 場所：附属図書館展示ホール(3階)

講演会：「公武合体と尊皇攘夷運動」
 講師：佐々木克教授(人文科学研究所)
 日時：平成6年10月14日(金)
 午後3時～4時30分
 会場：附属図書館AVホール(3階)
 (雑誌・特殊資料掛)

電子版展示会の開催について

はじめに

「静脩」Vol.31、No.1に掲載された、原田図書館情報大学教授の講演記録にもあるように、現在京都で開催されているITU(国際電気通信連合)の総会にあわせて、電子図書館システム(以降は、愛称Ariadneを使用)のデモンストレーションが、京都国際会館、けいはんなプラザ、そして京都大学を結んで行われています。京都大学附属図書館では、展示会「吉田松陰とその同志」の内容などを電子化して、Ariadneの一部として提供するとともに、附属図書館4階においてデモンストレーションを行っています。(9月26日(月)～10月28日(金)まで、土曜、日曜、祝日を除いて午前10時～午後5時)

1 Ariadneについて

Ariadneは、電子図書館研究会(代表者：工学部長尾教授)が研究・開発中のシステムで、画像、音声などを含んだハイパーテキストを検索できるソフトウェア、Mosaicをベースとしてその上にアプリケーションが構築されています。今回公開されているメニューには、「世界の図書館」「大学案内」「催物案内」等があり、書誌情報ばかりでなく、画像情報や全文データにもアクセスできます。サーバは、京都大学の工学部と附属図書館に、クライアントはサーバ設置場所以外に京都国際会館と、けいはんなプラザに置かれています。そして、これらサーバと

クライアントは、B-ISDNで結ばれ、大量情報の高速通信を実現しています。

電子版展示会は、メニューの中の「催物案内」を選択することによって、見る事ができます。

2 電子版展示会について

展示会「吉田松陰とその同志」の展示物は、京都大学附属図書館の所蔵する「維新特別資料文庫」の中の一部です。今回の電子化にあたっては、展示物だけではなく、同「文庫」中の巻物、軸物の大部分(約1000点)を写真撮影しましたが、電子化した点数は70点程です。また未撮影の資料もまだ1000点程残っており、全体の電子化は今後の課題として残されています。

電子版展示会の内容は、各文献・資料の書誌情報、解説、人物解説、画像情報をハイパーテキスト化したものです。なお、インターネットを経由した海外からのアクセスも想定して、英文による解説等も入れております。画面上でリンクをたどって行くことによって、様々な順序で展示物を見ていくことが可能になりますので、自分の興味にあった展示会を仮想体験することができるといえましょう。また、画像情報は併設されているハイビジョンでも、より鮮明に見る事ができます。(システム管理掛)

LSN(Library Service News)の創刊

この度、附属図書館のサービスを利用者の皆さんに紹介することを目的とした新しいニュースレター、LSN(Library Service News)を創刊しました。7月14日にNo.1を刊行しました。今後は月1回1日に発行予定です。1Fメインカウンターおよび3F雑誌・特殊資料掛カウンターで配布しています。開館日程表とあわせてご覧ください。(参考調査掛)

地下書庫のOPAC稼働開始

9月1日より、地下2Fの2カ所(エレベーターホール前と、バックナンバーセンター入口)に設置しているパソコン端末(各1台)で、OPAC/ILIS目録検索が利用できるようになりました。これにより、地下書庫で所蔵巻号の範囲や配置先、請求記号等の再確認が、1Fまでもどらなくても可能になります。なお、使用できる時間は、月曜から金曜までの午前9時(開館)から午後4時45分までです。

(参考調査掛)

全国共同利用図書資料（大型コレクション）の利用案内について

この度下記大学図書館より、平成5年度全国共同利用資料（大型コレクション）について利用案内がありましたので、お知らせいたします。

なお、内容につきましては、附属図書館内の参考コーナーをご参照下さい。

• 岩手大学附属図書館
「故宮博物院の名蹟 法書」*内容明細あり

• 徳島大学附属図書館
「静嘉堂文庫所蔵 古辞書集成（マイクロフィルム版）」*内容明細あり（参考調査掛）

部局からのお知らせ

展示会の開催（経済学部）

名称：“かわら版から新聞へ：京大経済学部所蔵「上野文庫」展”
主催：京都大学経済学部・朝日新聞社
会期：平成6年10月15日（土）～10月23日（日）
10：00-17：00（期間中無休）
会場：思文閣（百万遍西）

同講演会

講演会：「新聞の生い立ち：市民社会の隣人」
日時：10月18日（火） 14：00-
講師：北畠清泰（朝日新聞社論説副主幹）
※いずれも無料

図書館の動き

商議会の開催

平成6年度第1回の附属図書館商議会が、去る7月28日に開催されました。今回は平成5年度決算報告、平成6年度予算方針、平成6年度大型コレクション収集計画等が討議されました。

商議会終了後、選書分担商議員会議が開かれ、平成5年度の学生用図書、特別図書等の購入報告、また平成5年度から配分されることになった自然科学系図書購入費による購入図書の報告も行われました。

引き続き自然科学系選書分担商議員会議が開かれ、平成6年度自然科学系外国雑誌購入費の配分についての報告があり、平成7年度自然科学系外国雑誌購入費割当枠についても審議されました。

京都大学附属図書館将来構想検討委員会の設置

大学を取り巻く環境の急激な変化の中で、これからの大学図書館はその機能の強化・高度化がもたらされており、利用者の多様なニーズに的確かつ積極的に応えていく必要があります。そこで平成6年9月6日に、附属図書館の将来の在り方を検討するために、標記の委員会が設置されました。親委員会の下に7つの部会が設けられ、それぞれ分野を特定し現状分析や将来構想について検討することになっています。委員会及び部会は附属図書館の部課長、専門員、掛長、掛員、及び部局図書系の掛長から構成されます。この委員会、部会で検討された問題は整理された上で商議会に諮られる予定です。

目次

<巻頭記事>

坪井家旧蔵本の洋学資料…………… 1

<その他記事>

理学部図書管理システムについて…………… 4

鈴鹿本今昔物語集の修補に関わって…………… 5

<お知らせ>

展示会「吉田松陰とその同志」の開催について… 6

電子版展示会の開催について…………… 7

LSN (Library Service News)の創刊…………… 7

地下書庫のOPAC稼働開始…………… 7

全国大型コレクション紹介…………… 7

<部局からのお知らせ>

展示会『かわら版から新聞へ：京大経済学部所蔵「上野文庫」展』の開催について（経済学部）… 8

<図書館の動き>

商議会等の開催…………… 8

京都大学附属図書館将来構想検討委員会の設置… 8